

# 社員は宝。

創業70年、  
そして次の時代へ。

北海道で一般電話が開通したのは明治33年。戦時の混乱を経て戦後は電話加入数が増加の一途を辿っていた。橋本電気商会にも1日150件の工事依頼に入るほど。自転車やそりで材料や工具を運んで現場を駆け回ったが、申し込みから5年後の工事も珍しくない時代。工事に訪れると、大歓迎を受けることもあった。当時、国鉄の信号保守などの仕事を舞い込み、電気設備工事にも対応するため専門の社員も採用。社員を増やすながら、市内の電話普及に奔走した。昭和35年には電気工事の元請を目指し、法人化。後に2代目社長となる弟の昭夫を営業として雇い入れた。公営・民営問わずに受注し、電気設備工事は軌道に乗った。さらに昭和50年代に入ると無線伝送事業部を発足させた。一方、固定電話の申し込みは減少が続き、平成16年に3代目社長に就いた橋

ポケットから電話を取り出して誰かと気軽に話す。今や日常に溢れるこの風景は、「一人の男が夢見たものだったのかもしれない。男の名は橋本新一。橋本電気工事創業者だ。通信省を退職した後東区の自宅に事務所を設立して電話工事の会社を立ち上げた。それが橋本電気商会。昭和27年のことだ。

札幌ドームなども同社の施工だ。

その後、土岐田昇が4代目社長に就任。創業家ではない社長は初めてだが、土岐田が大切にしているのは創業から受け継がれる「社員は宝」という理念。環境整備の一貫として就業規則やマニュアルを改訂したのもこの想いからだ。

人と人を結ぶ電話工事、まちづくりの一翼を担う電気設備工事、そして災害から人命とまちを守る無線設備工事。土岐田は創業70周年に向けてこう語った。「当社は人と人、人とまちを恒久的に結んできた。社会基盤に携わる持続可能な事業によって、100年企業を目指していく」と。市民から必要とされる工事がある。それはあの頃も、今も、そして次の時代も変わらない。



写真右より、3代目社長、  
2代目社長、4代目社長



橋本電気工事株式会社

<https://hashimotodenki.co.jp/>

本耕二は電話工事からの撤退を決断。前に進み続けるための大きな方向転換だつた。主軸は電気設備工事と無線工事になつたが、札幌市から優良施工業者表彰を何度も受け、公共工事の単独受注もできるようになった。市民なら誰もが知つているモエレ沼のガラスのピラミッド、環状線エルムトンネル、札幌ドームなども同社の施工だ。